

校長雑感



蓬田 弘

一、恩師の招待

教え子の結婚式に招待されることは心うれしいことである。先日母親の結婚式があり、その席にも恩師の代表ということで中学校時代の担任が招待されていた。いたずらに美辞麗句を述べることなく、そのたんたんとした言葉のなかに、中学時代の教え子の思い出を語り、今日のあることを祝福し將來への心構えを述べたなかに感動を呼ぶものがあつた。

このような席に、校長を恩師として招くことはまずないといつてよい。こうしたことから、学級や教科担任時代の生徒とのふれあいは大事にしなればならないし、ほめ上手、しかり上手な教師でありたいものである。

二、校長と生徒とのふれあい

私は現任校で校長として三校めである。小学校と中学校、それに地域によって児童や生徒とのふれあい、父兄とのふれあいにいろいろの思い出があるが、その内容も質も異なるものがある。楽しく心あたたまることも多いが、なるといっても校長と子供とのふれあいでは、心を痛めるものの方が多い。手にあまるような問題を持つ場合に、その子供たちに対する指導や処置を、学級担任や親たちから求められることが多いからである。病人でいえば、かなりの重症患者とのふれあい―診断治療―に相当する。総合病院の院長先生にでもたとえられようか。

中学校では、特に生活や学業の問題

就職や進学のことなどのほかに、これらに関連した家庭問題まで含めた広い範囲にわたつて、かなり深刻なことでふれあいが深い。校長は校務をつかさどり所属職員を監督する立場にあり専門化され組織化されている現在の学校運営のしくみからみて、所属職員の一一人一人にそれぞれの立場で、責任感と識見と指導力とを期待するものである。

三、担任時代を省みて

なんといつても、学級担任、教科担任としての生徒とのふれあいが、教師としての子供とのふれあいの中心である。この時代を特にたいせつにしたいものである。なお問題場面では、次のことを配慮しておく必要がある。

教師として問題の生徒に接するとき正しいことを常に言つて聞かせるのであるし、その生徒のために役立つはずであるとの考えで指導し、きつとわかつてくれるに違いない、実行もまたしてくるにちがいないと思ひ、安心し油断しがちであることである。ところが実際は、そうでない場合が多いのが事実である。親の心子知らずとでもいおうか、担任教師の思うほどに自覚していない場合が多く、また自覚して本気で実行するほどの心、誠意を、全部の子供が持っていると思うのは、早計に過ぎると思われる。このような子供が、勤務したそれぞれの学校に何人か

いた。そのなかには、後日重大な社会問題をおこした、不幸ふびんな子供とのふれあひもあつた。

学級担任時代を省みて心にのこるものは、このようなことが心あたたまることよりも多い。ほのぼのとしたものを書きたいと思ひながらも、校長としての心配や悩みが先にたつのが、偽らざる現実の姿である。

ともあれ、たいていの人間は、日夜あたたかい指導の下にあつて、ようやく誤りなく過ごすことができるということであろう。おもしろいことをかゝる、おもしろくなる、そうした意味での生徒とのふれあいをしなければならぬことが多い。校長として、意識過剰にもならず、その存在をあまり強く子供たちに意識させないよう心をつくばりながら、偉大な未完成品である生徒たちに、接していきたいと思う昨今の心境である。

(国見町立東北中学校長)